

ここまではいいけれど、ここからはみ出てはいけない、そういう考え方は多くのキリスト者に見られる。こういう「境界線思考」は正統派意識の表れであり、仲間の間に猜疑心と分裂をまき散らす。筆者は、そのような考え方から、本当に中心的なものを大切にする「中心点思考」を身につけるようにと励ましている。本資料は、2007年の大野キリスト教会における教育セミナーで語られた講演原稿を一部修正・加筆したものである(2013年10月)。

境界線思考ではなく中心点思考を

周囲の仲間を信頼し、より豊かな人生を送るために

ごあいさつ

今年の教育セミナーにお招きをいただき、心より感謝申し上げます。セミナーの担当者からは、「テーマは先生にお任せします。話したいことを何でもよいから話してください」と言われました。そこで、どんなことをお話しすれば教会の皆様役に役立つのだろうか、そんなことを考えながらずっと祈り続けてきました。そして、「境界線思考ではなく中心点思考を」というテーマが思い浮かびました。そこに至った背景から説明させていただきます。

最近私は、いろいろな学会に参加しています。キリスト教関係の学会だけではなく、ちょっと考えるところもあって、一般のセキュラーな学会にも出席しております。そのような中で、クリスチャンには、「キリスト者の狭さ」という独特のものがあるのだなあ、としばしば感じさせられました。これは、福音派のキリスト者に限りません。プロテスタント主流派の会合でも、エキュメニズム(教会一致運動)の学習会でも同じです。カトリックの友人司祭やカリスマ派の友人牧師との会話からもそれを感じました。人柄は皆よい方々ばかりなのに、どうして自分たちの信仰やあり方を絶対視し、広い心で他を受け入れることができないのだろうか。

むろん信仰者である限り、ゆずれない部分はある。しかし、周辺のなごうでもいいことにこだわりすぎる。どうしてそんな子細なことにこだわってしまうのか。寛大になり、相手の位置に自分の身を置いて、他の人の意見に耳を傾けようとしなければならぬのだろうか。そもそも宗教とはそういうものなのだ。自分のこれまでの歩みを振り返ってみるなら、大同小異ではないか。神は、今のキリスト者と教会をどのようにご覧になっているのだろうか。これでよいはずはない。何とかして、そこから抜け出さなければならない。でも、どうやって? …

そんなジレンマが、このところずっと私から離れませんでした。そのような中から出てきたのが、「境界線思考ではなく中心点思考をしなければならぬ」ということでした。そして、もしこのような考え方を皆様が身に着けてくださるなら、「キリスト者は狭く偏った見方をする人々だ」という批判を吹き飛ばすことができるでしょう。その結果、キリスト者の信じている福音のすばらしさがもっともっと大きく輝くことになるでしょう。何よりも、キリスト者の歩みが自由になり、創造的で楽しいものになるはずです。それは単に、信仰生活や教会生活だけに限らず、日常生活のどんな場面にも及んでくると思います。

というわけで、ぜひ大きな期待をもって本日の講演をお聞きいただきたいと思います。

1. こだわるべきこととこだわってはいけないこと

ある書物の中に、「こだわりを持っていると、周囲の人々との関係を難しくする」という文章がありました。この言葉を読みながら、確かにそうだなと思わせられるところがありました。でも、ちょっと時間が経ってから、気づいたことがありました。もしこんな風に言いきってしまうと、こだわることはすべていけないことになり、何もこだわらないのが一番良いということになる。著者はそういうことを言いたかったのだろうか。違うはずだ。むしろ、世の中には、こだわるべきこととこだわってはいけないこととがある。こだわってはいけないことにこだわり、こだわるべきことにこだ

わらない、それこそが問題なのだ、そう言いたかったのだろう。

今日は、このような問題をパウロの生き方から考えてみましょう。パウロは、キリストの救いを受けるにはユダヤ教の名残である割礼は必要ないと考え、福音を伝えていました。ところが、ユダヤ人で構成されていたエルサレム教会のキリスト教徒たちは、そのことを問題にしてパウロとシラスを召喚しました。公会議が開かれ、キリストの救いを受けるのに割礼は必要ないとの結論に達しました。その出来事は、使徒の働き 15 章に記されています。ところが、続く 16 章の初めに、興味深いエピソードが出てきます。

パウロは、このテモテを連れて行きたかったのですが、その地方にいるユダヤ人の手前、彼に割礼を受けさせた。彼の父がギリシヤ人であることを、みなが知っていたからである。(使徒 16:3)

テモテは、父親がギリシヤ人だったので「割礼」を受けてはいませんでした。割礼は、ユダヤ人にとっては神との契約のしるしで重要でしたが、ギリシヤ人にとっては全く意味のないものでした。そのような無割礼のテモテに対し、パウロはここで割礼を施した、ということです。つまり、前の 15 章のエルサレム会議で決議されたことと全く矛盾する行動をパウロは取ったということになります。

そのような矛盾する行動を、パウロはどうして取ったのでしょうか。「ユダヤ人の手前」という句に、その鍵があります。テモテが割礼を受けない限り、ユダヤ人社会は彼を受け入れられることはできませんでした。ということは、パウロはテモテを宣教活動に同行させることはできなかったということになります。パウロは、ユダヤ教徒だった人たち(その中には、今はキリスト者になった人も、未だそうではない人もいました)がテモテを受け入れることができるよう、割礼を施したのです。

このようなパウロの行動に対し、一貫性がないとか便宜主義者であると批判する人もいるでしょう。しかし、それは皮相的な見方です。パウロは、キリストの救いを受けるのに割礼が必要であると主張する人々には、断固として反対しました。それは、福音の真理の根幹にかかわることだったからです。ところが、その福音を宣教するための手段であるなら、正反対の行動を取ることに一切躊躇しなかったのです。

この記録は、同じ物事であっても、こだわらねばならない時もあれば、こだわってはいけない時があることを示唆しています。もし、この行動原則を会得するなら、私たちの信仰生活は自由で、創造性に富んだものになります。人との関係もスムーズに運ぶようになり、神からの自信に満たされた歩みができるようになります。多くのキリスト者が、こだわるべき時にこだわらず、こだわってはいけない時に、こだわってしまうという間違いを犯してしまいます。それが、不自由さや息苦しさを感じさせ、信仰の歩みをつまらないものへと追いやってしまいます。

イエスほど、物事にこだわらずに生きた方はいません。当時のユダヤ社会からすれば、アウトサイダーそのものでした。異邦人のサマリヤの女性に水をもらおうとしたこと、ローマ兵士だった百人隊長の信仰を「イスラエルにこれほどの信仰を見たことはない」とほめられたこと、安息日に病人を癒されたこと、手を洗わずに食事をしたこと、神殿をきよめたこと、どれ一つをとっても、ユダヤ社会の境界線を越えたことでした。イエスが説かれた神、神の国のメッセージ、ご自分を神と同一視されたことなどは、パリサイ人にとっても、宗教的指導者たちにとっても、民衆にとっても、すべて不可解なことでした。

といっても、イエスは何もこだわらなかったというわけではありません。イエスは、神の国の生き方を明らかにしましたし(マタイ 5-7 章)、弟子たちの伝道に対して細かな指示を与えました(マタイ 10 章)。パリサイ人の偽善性を告発し(マタイ 23 章)、神殿宗教の不正と墮落を暴露し(マタイ 24 章)、時の権力者には毅然と立ち向かっていったのです(マタイ 26 章)。イエスは、こだわるべきこととそうでないことの両方を明確な区別をしていたのです。

2. 境界線思考の伝統の中で形成されてきた日本の福音派

こだわりとは、「これはいい、これはダメ」とジャッジすることです。このような考え方を「境界線思考」といっておきましょう。この「境界線思考」を理解していただくため、最近経験したことをお話させていただきたいと思います。

今から7年前、私は大野教会の主任牧師を辞しました。牧会の責任から解放されたなら、世界中で開かれているいろいろな学会に参加したいというのが私の夢でした。神学とか聖書学あるいは宗教学の分野に限らず、自然科学や哲学、人間学の分野にもずっと興味がありました。今さら学校に通うというわけにもいかないの、その時その時の最先端の学びができる学会に足を運ぶことにしたのです。そこに行けば、最新の情報や書物が手に入ります。何よりも、今が旬と言われる学者たちの講演を聞けることが大きな楽しみでした。日本はむろんのこと、アメリカ、イギリス、オランダ、ドイツ、オーストラリア、シンガポールなどで開かれるいろいろな学会には、武者修行のつもりで、ほとんど毎年出かけました。書物だけだった方々に直接お話しできるのは、本当に楽しいことでした。

その中の一つに、アメリカの福音主義神学会があります。その学会には留学時代から関わっていましたので、かれこれ30年のお付き合いになります。毎年たくさんのことを学べましたので、連合の若い先生がた、丸山先生、佐々木先生、木森先生たちとよく一緒に参加しました。その様子をときどきクリスチャン新聞にレポートしましたので、皆様の中にも気づかれた方々がおられるかと思います。

ところが3年前、私はその学会を脱会することにしました。というのは、その学会では、その10年ぐらい前から、「The Boundary of Evangelicals(福音派の境界線)」というテーマを掲げ、聖書の無誤性はどの範囲にまで及ぶのか、聖書批評学はどこまで受け入れることができるのか、神は将来のことをどこまで決めておられるのか(このことは、Open Theism と言われる議論です)といった問題を、毎年毎年飽きることなく議論していました。これらの問題は、むろん興味あるテーマであり、大切な事柄なのですが、その扱い方にとってもついていけないものを感じていました。真理の追究というより、学会としての許容範囲はどこまでかという、ネガティブな議論が中心でした。

特に、カナダのクラーク・ピノックとアメリカのジョン・サンダースという二人の学者は福音主義の立場を逸脱している、学会から追放すべきである、という議論が戦わされていました。そして3年前の総会において「彼らが学会に留まってよいかどうか」という投票が行われました。二人が自説を講演し、批判者が反論を試みるという形で論争が展開されました。ここまで全学会員の前で批判されながら、二人はどうして学会に留まりたいのだろうか、私ならさっさと脱会してしまうだろう、と考えながら、議論を聞いていました。

真理追求というレベルであるなら、どれだけ時間を費やしても構いません。しかし、これは従来の考えは正しいとの前提で、二人の考えはその範囲内に収まるかどうかという議論なのですから、全く非生産的なものでした。幸い二人は、全学会員の投票の結果追放されずに済んだのですが、アメリカ人のメンタリティーにはついていけないものを感じ、学会を脱退することにしました(注一決議が行われた2004年の時点でそのように決めたのですが、2011年から再びメンバーになり、学会に参加しています)。

信仰告白を標榜する学会である限り、時には境界線を引く必要もあります。しかしそんな場合でも、学会である以上、論議されている内容を学問的にきちんと精査することは不可欠です。ヨーロッパやオセアニアなどの学会では、境界線意識に基づいて物事が論じられたり、ジャッジされたりすることはありません。たぶん、アメリカ文化特有の世界から来るのだと思います。一連の議論において、境界線思考をリードしていた学者の中に、恩師ミヤード・エリクソンをはじめお世話になった多数の学者たちがいたことをとても残念に思いました。

この範囲までは許されるがそれを超えてはいけない、そういう考え方が「境界線思考」です。残念ですが、日本の福音派の神学校と教会は、そういうメンタリティーに毒されてきたと言わねばなりません。福音派の教会の多くは戦後アメリカから来日した宣教師によって生まれ育てられました。福音派の神学校の日本人教師たちの多くはアメリカの神学校に留学しました。日本の神学校のほとんどで、アメリカの神学校の教科書(の翻訳)が使われてきました。このようなところから、日本の福音派はアメリカの福音派のコピーのようなところがあります。アメリカからのすばらしい遺産をたくさん受けながら、負の遺産をもまた受けてしまったと言わねばなりません。

日本の福音派は、境界線思考を基盤にしつつ自らのアイデンティティーを形成してきました。戦前からの福音派の教団と戦後誕生した福音派の諸教会は、プロテスタント宣教百周年を記念して、1959年に日本プロテスタン

ト聖書信仰同盟を結成しました。聖書信仰を旗印にしなが、社会派的キリスト教、聖書の高等批評学及び新正統主義神学、第二バチカン公会議以降のカトリックの動きに対し、アンチテーゼ的存在として、揺れ動く60年代から70年代を乗り越えてきました。そういう中で、新改訳聖書が翻訳され、クリスチャン新聞が発行され、日本福音同盟を中心に日本伝道会議が開催され、さまざまな各種伝道団体が協力し合って、戦後の福音派諸派と言われる弱小教団を主流派教会に並ぶほどに育て上げてきたのです。

しかしここに来て、福音派の諸教会の世代交代も進みつつあり、境界線思考のほころびも見え始めてきました。パラダイムシフトなどという言葉も語られるようになってきました。このことに危機意識を持つ人々も当然ですが、歴史の流れを逆戻りさせることはもはやできないでしょう。日本社会全体が大きく変わりつつあります。福音派諸教会は円熟さが求められています。1980年から90年代にかけての聖霊派グループとの緊張関係も次第に落ち着いてきました。霊性を強調するグループはカトリックとの親和性を見出しています。聖書批評学を前提とした成果を学ぼうとする福音派の聖書学も台頭しつつあります。聖書的な教会論を展開し、福音派がエキュメニズム運動の旗振り役を演じている都市も現れています(注、相模原市の牧師会の動きを指す)。

福音派の看板的なキャッチフレーズ「聖書は誤りなき神のことばである」という標語をお題目のように唱えていればまとまれる、そういう時代は終わりました。戦後の教会(教派)形成を担った世代から2世代目、さらには3世代目へと世代交代が進み、過去にはほとんどこだわりをもたない若き指導者たちが表舞台に出てきています。神の国の推進役は、既に彼らに移行しつつあります。

このような中で、日本福音同盟は原理主義の克服を目指し、教会の合同性を模索し、「和解の福音」を掲げて第5回の日本伝道会議を2009年9月に北海道で開催しようとしています。その年は、プロテスタントの日本宣教150年目にあたります(1859-2009年)。私たちもこぞって参加し、日本のキリスト教会に貢献していきましょう。

これまで私は、境界線思考を聖書解釈や神学の部門の話として語ってきました。むろんそれだけではありません。福音派は、同性愛の問題、堕胎の問題、女性教職の問題、冠婚葬祭の問題、日本文化と宣教の問題、政治的・経済的・社会的問題、歴史認識の問題、格差社会の問題、地球環境の問題、自然災害の問題など、対応しなければならない問題を山ほど抱えています。これらの問題の一つ一つに対し、境界線思考ではなく、中心点思考にシフトしながら、的確な回答を提示する責任があると考えております。

3. 境界線の外にあるグループに対して

ここでちょっとわき道にそれ、福音とは全く異なる信仰をもち、境界線上に上がってもこないグループのことにふれておきたいと思います。それは、「異教」とか「異端」、「カルト教団」とか「カルト化する教会」などの問題です。

「異教」とは、キリスト教以外の宗教を指します。例えば、仏教、イスラム教、ヒンズー教などです。これらの宗教はキリスト教から見て、異教とされるのは理解していただけたと思います。ただし、異教についても考えねばならないことがあると私自身は思っております。かつては、異教とは偶像崇拜であり、よきものは一つもなく、戦い滅ぼされるべきものだと考えていました。しかし異教は、歴史の中で国家や社会が一定の道徳的・倫理的な基準を保つため、神が備えられた宗教という側面があるのではないかと考えています。むろん、そこに救いがあるなどとは考えておりません。

ユダヤ教は一般に、キリスト教の準備段階の宗教と見なされ、多くの宗教学者が「ユダヤ・キリスト教」とセットで扱う傾向が見られます。もしユダヤ教が旧約聖書のみを正典として扱っているのであれば、このような理解は正しいと言えます。しかし、ユダヤ教は、厳密にいうと、旧約聖書以降に記されたタルムードなどの文書から旧約聖書を解釈し直している宗教です。従って、キリスト教と同一線上に扱うのは避ける方が賢明でしょう。

「異端」とは、キリスト教を名乗りながら聖書の福音とは全く異なることを説いているグループを指します。よく知ら

れているグループとしては、ものみの塔、統一協会、モルモン教などがあります。特に最近では、統一協会を基にした異端的グループがたくさん出てきており、中には正統的なキリスト教と区別することが難しいものもあります。

この「異端」という言葉に近いニュアンスですが、少々意味が違う「カルト化した教会」についても説明しておきましょう。異端の場合は、教理的におかしな点があるはずですが、カルト化した教会においては、教理的におかしいところを見つけることは難しいのが普通です。そこではむしろ、組織的な事柄、特に絶対服従を迫るようなリーダーの存在が問題になります。マインドコントロールの手法によって情報がコントロールされ、恐怖心が煽られるのが普通です。はっきりカルト教団だと团的できる場合もありますが、その危険性をもっているもの、その途上にあるものなど、いろいろです。異端であれ、カルトであれ、そのようなグループに対しては、次のような聖句を適用する必要があります。

しかし、私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。もしだれかが、あなたがたの受けた福音に反することを、あなたがたに宣べ伝えているなら、その者はのろわれるべきです。(ガラテヤ 1:8-9)

愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです。(Iヨハネ 4:1-3)

4. 中心点思考とは何か

では次に、「中心的思考」とはどのようなことをいうのでしょうか。まずパウロが福音について述べていることを考えてみましょう。

兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のこぼしをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと、また、ケパに現われ、それから十二弟子に現われたことです。

(Iコリント 15:1-5)

パウロはここで、自分が宣べ伝え、初代キリスト者たちが受け入れた「福音のこぼし」を解説しています。それは、「キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと」です。パウロは、この福音理解については、徹底してこだわっています。

使徒たちが宣べ伝えたのは、「イエスがメシヤ、あるいは主である」ということでした(使徒 2:36、9:22、17:3、18:28)。それは、キリスト教の体系的な教理でも行動に必要な倫理基準でもなく、よみがえって今も生きておられるイエスご自身だったのです。イエスは、キリスト者の罪を赦し、永遠のいのちを与え、御国を継ぐ者としてくださいました。それが福音です。私たちの信仰、歩み、生き方の中心にこの福音を置くことが、中心点思考なのです。

なお、中心的思考に置くべき福音の理解について、どうしても皆様にお話しておかねばならないことがあります。それは、「キリストの十字架の贖いは人間の被造物の管理権を回復した」というヘブル人への手紙 2 章のメッセージです。これまでの教会は、福音を「罪が赦されて天国に行くことだ」と説いてきました。これは、カトリックからカリスマまで変わりません。このような福音理解は、明らかにイエスの説かれた「神の国の福音」から切り離されています。これでは「欠陥福音」と言わねばなりません。この点については、これまでの教育セミナーにおいて何度も繰り返しお話ししてきました。といっても、残念ながらほとんど誰も注目してくれませんが・・・(注一このセミナーの 4 年

後に起こった東日本大震災以降は、「被造物管理の神学」として日本のキリスト教界において次第に注目されるようになってきました。

今日のセミナーでは、これ以上お話することはしません。今日のテーマから外れてしまいますので。福音の内容をどう理解しようと、福音が中心点思考の中心を占めることに変わりはないのですから。

5. 境界線問題に対する対応の仕方

いかがでしょうか。中心点思考というものをお分かりいただけたでしょうか。それでは、境界線上にあると思われるような問題が起こったとき、キリスト者は具体的にどのように対応すればよいのでしょうか。私は、少なくとも五つの事柄を考えてみるとよいと思います。そのうちの一つ、あるいは二つ、時には三つをミックスしながら対応されるとよいでしょう。

まず、神様の導きを求めるということです。祈ることです。神様は、境界線を越える必要のある時には、特別示してくださることがあります。パウロは最初、自分の伝道領域はアジアだけでよいと考えていました。そんな時マケドニア(ヨーロッパ)の人々の声を聴いたのです(使徒 16:7)。同じようなことがペテロにも起こりました。彼にとっては福音を異邦人に伝えるなどということは考えてもみないことでした。そのようなペテロの境界線を打破するためには、神は一つの幻を示されました。

すると彼は非常に空腹を覚え、食事をしたくなった。ところが、食事の用意がされている間に、彼はうっとりとして夢ごちちになった。見ると、天が開けており、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来た。その中には、地上のあらゆる種類の四つ足の動物や、はうもの、また、空の鳥などがいた。そして、彼に、「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい」という声が聞こえた。しかしペテロは言った。「主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」すると、再び声があつて、彼にこう言った。「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」こんなことが三回あつて後、その入れ物はすぐ天に引き上げられた。(使徒 10:10-16)

神の啓示は、ペテロがそれまでもっていた境界線を取り払ってしまうものでした。この神の示しに基づき、ペテロは異邦人のコルネリオを訪問し、福音を語りました。この啓示なくしては、エルサレム教会が異邦人伝道に踏み出すことはなかったでしょう。キリスト者は判断に迷うとき、神に祈り求めることが大切です。神は、御言葉を通してか、聖霊のささやきを通してか、状況の展開を通してか、はともかく、キリスト者が判断できるように導いてくださいます。

第二は、神がその問題に対しどのように決着されるかをよく観察して、判断することです。物事の中には、すぐ決着しなければならないこともたくさんあります。しかし、しばらくほっておき様子を見てから判断しても遅くはないという事柄も、少なくありません。人間的な仕事をすべて止め、神がどのように采配されるのかを見て判断することは、時にとても大切です。次のガマリエルの言葉に耳を傾けてください。

ところが、すべての人に尊敬されている律法学者で、ガマリエルというパリサイ人が議会の中に立ち、使徒たちをしばらく外に出させるように命じた。それから、議員たちに向かってこう言った。「イスラエルの皆さん。この人々をどう扱うか、よく気をつけてください。というのは、先ごろユダが立ち上がって、自分を何か偉い者のように言い、彼に従った男の数が四百人ほどありましたが、結局、彼は殺され、従った者はみな散らされて、あとかたもなくなりました。その後、人口調査のとき、ガリラヤ人ユダが立ち上がり、民衆をそそのかして反乱を起こしましたが、自分は滅び、従った者たちもみな散らされてしまいました。そこで今、あなたがたに申したいのです。あの人たちから手を引き、放っておきなさい。もし、その計画や行動が人から出たものならば、自滅してしまうでしょう。(使徒 5:34-38)

ユダヤ議会は、彼らにとって全く新しい教えだったキリスト教が神からのものか、人からのものか判断せねばなりません。このとき、しばらく様子を見て、それから判断しても遅くはないとアドバイスしたのが、知識と経験豊

かな律法の教師ガマリエルでした。彼は、歴史上起こった事例を参照し、賢明な判断をするよう勧めたのです。

第三は、自分に課せられた使命に専心して歩むことです。私はある問題の対応に悩んでいたとき、「責任を取れないことに首を突っ込むな」と忠告されたことがあります。英語で言えば、That's not your job というところでしょうか。キリスト者はときどき、自分の責任外のことに関心を持ちすぎます。いわゆるおせっかいということですね。そんなとき、パウロの生き方に聞くとよいでしょう。パウロは、他の人がどのような動機から述べ伝えているにしても、もしキリストが伝えられているなら、それを喜ぼうと言いきりました。

さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、また兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことにより、主にあつて確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神のこぼを語るようになりました。人々の中にはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もいますが、善意をもってする者もいます。一方の人たちは愛をもってキリストを伝え、私が福音を弁証するために立てられていることを認めています。他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。すると、どういふことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであつて、このことを私は喜んでます。そうです、今からも喜ぶことでしょう。(ピリピ 1:12-18)

なぜ、パウロはこのように寛大な気持ちになれたのでしょうか。神が人々の動機に至るまで裁かれることを信じていたからです。私は、人に対して批判的な気持ちになることがときどきあります。そんなときいつも、このパウロの生き方を思い出します。すると、さばくのはあなたの仕事ではない、あなたは自分に課せられている仕事を忠実に果たしなさい、そう聖霊が語りかけてくださっているように感じます。

第四は、多くの問題を真理の問題と考えず、文化の問題と考えなさい、ということです。私はキリスト者に成りたての頃から、いわゆる創造科学の考え(この世界は紀元前 4000 年頃創造されたという考え)はおかしいと思っていました。どう考えても、最近の科学が明らかにしている 137 億年前の方が正しい。とすれば、彼らの考えは正されねばならない、そう考えていました。それは、科学をちょっと学ばずぐに分かるはずだと思っていました。

ところが事実は違いました。創造科学論者は、あらゆる屁理屈をくつつけて自分たちの考えを正当化してきます。それを、論理が完結していると言います。この論争を私は、長い間「真理の問題」と捉えていました。そもそもそれが間違いだったのです。創造科学論者は、聖書字句拘泥主義という文化に育った人々なのです。だから、彼らの文化を受け入れる以外にないのです。パウロ流に言えば、字句拘泥主義者には字句拘泥主義者のように、科学信望者には科学信望者のようになることが求められているのです。

私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。ユダヤ人にはユダヤ人のようになり、それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者ようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。… 弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのもとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みをもとに受ける者となるためなのです。(I コリント 9:19-23)

宇宙創造の年代は、科学者にとっては重要な問題でしょう。それを議論するのは科学者の責任です。キリスト教の牧師として私のすべきことは、創造科学を信じる人に対しては、200 年か 300 年前の人々に語るように、現代の科学的な教育を受けた人には現代の文化を背景に福音を語り続けなければならない、ということでした。このように考え始めたとき、私自身ももっていた境界線思考は、音を立てて崩れて行きました。

第五は、ものごとこだわらない強い人も、どうしてもこだわってしまう弱い人も、自分の判断基準で行動してはいけないということです。思いやりの心を大切にすることです。ローマ教会には、食物や日を守るべきだという人たちとそのようなものは守る必要がないという、両方の立場の人たちがいました。その両者に対し、パウロは次

のように進めています。

あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。何でも食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかには食べません。食べる人は食べない人を侮ってはいけなし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです。あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。

(ローマ 14:1-6)

私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。キリストでさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかったのです。(ローマ 15:1-3)

これは結局、神と人とを愛して行動する、ということに他なりません。イエスは、『「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」これがたいせつな第一の戒めです。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者が、この二つの戒めにかかっているのです』(マタイ 22:37-40)と言われました。ヨハネは、このイエスの戒めを受け、神を愛することと兄弟を愛することとは不可分な関係にあると述べています。

神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。(Iヨハネ 4:20-21)

境界線上の問題を扱いながら、結局分裂的な行動を取ってしまうとしたら、そのこと自体がすでに愛から行動していないことを示しています。不正や悪、罪の問題であるなら、分離することが必要でしょう。しかし、どちらもあり得るような問題の場合には、神を愛し、人を愛するという行動原則に戻ることが大切です。自分の行動をいろいろな理由をつけて弁護することはやめましょう。愛に勝る理屈はありません。神と人への愛こそ、私たちの行動の最終決定者なのです。

結論

宗教の生命は、それはどのような宗教であっても言えることなのですが、本来原理主義の中においてしか保たれ得ないものです。ただし、ここで使われる「原理主義」という言葉には説明が必要です。原理主義には、2種類あります。物事をありのまま受け止めるという素朴な原理主義と、理論的に先鋭化された学問的原理主義です。この両者ははっきり区別しておかねばなりません。神の啓示的な真理は、素朴な原理主義において明らかにされ、受け止められ続けてきたものです。決して、理論的に体系化され、学問的に先鋭化された原理主義ではありません。それは、近代合理主義が生み出した一つの考え方に過ぎません。福音派がこれまで混乱を避けられなかったのは、この両者を区別できなかったことにあります。福音派の境界線思考の根源をたどると、結局この原理主義にぶつかります。

これからの福音派の歩むべき道は、この両者を明確に区別し、素朴な原理主義に戻ることにあります。そうする時初めて、境界線思考を乗り越え、中心点思考に立つことができます。そうすれば、キリストの福音は大きく輝くことでしょう。そして他のキリスト教のグループも、皆福音派の在り方に注目するでしょう。そのようにして、キリスト教界全体が、中心点思考に立ち戻ることができるでしょう。

イエスが説かれた「神の国」の実現を真に願うのであれば、そこから出発する以外に道はありません。